

仕事をするとは、 自分を元気にすること。



「46歳でこの仕事をはじめたとき、『定年の60歳まであと14年、がんばろう』と思っていました。でも、定年が近づいて来たころには、この仕事を離れるなんて考えられなくなって

いたんです」
そう語るのは、「社会福祉法人一燈園」でケアマネジャーとして働く福山貴代美さん(67歳)。白シャツをパリッと着こなす凛としたたた



「一燈園 浜脇センター」居宅介護支援事業所のみなさん。
福山さんは左から3番目。

という福山さん、同居する夫の両親を看取り「そろそろ働きたいな」と思っていたところ、友人から「一燈園」の求人話を聞いたそう。偶然にも「一燈園」の理事長が新聞に執筆していたコラムを愛読していたこともあって、介護の仕事に興味が出てきたという。介護職の経験はなかったが、「義理の父母と長く同居してきたし、お年寄りと接することには慣れているから、できるかもしれない」と思い立ち、介護職の世界に飛び込んだのだ。

大変だな」とそのときは思ったそうだが、前向きで努力家の福山さんは日々の仕事をしながら試験に向けての勉強や研修もこなし、見事、次々と資格を取得していった。「資格取得はやはり大変でしたけど、資格のおかげでこうして今も仕事を続けていられるので、本当に『一燈園』には感謝しています」と福山さんは語る。
平成16年(2004年)2月に「一燈園 浜脇センター」の居宅介護支援事業所が開所して以来、福山さんは今日までケアマネジャーとして勤務を続けている。要介護者などに対して自宅で自立した生活を営むことができるように適正な居宅介護支援を行っている。事業所では、支援する約130件のうち、福山さんが30件前後を担当

1日でも長く働きたい!

ずまいのシカッポい女性だ。60歳の定年退職後も再雇用を希望し、定年前と同じ内容の仕事を続けている。
働く前までは専業主婦だった

している。ケアマネジャーは担当するすべての方を月に一度は訪問することになっているが、病气や体の不自由を抱える要介護者のこと、予定通りにいかないのが常なのだそう。病状の変化、ケガや事故、認知症の進行などによって、急遽駆けつけなければならぬことも多い。「いつ、なにが起こるか分からない」「要介護者の日々に寄り添い、サポートするのが福山さんの仕事だ。」
ときには要介護者の家族や親族の間に入って意見をまとめる手助けをしたり、そのため家庭のプライベートな部分まで知ることになったりと、仕事内容は多岐にわたる。

「仕事をやめようと思ったことは一度もないんです。『福山さんに頼んでよかった』と言われることが励みになって、いつの間にかこの仕事が自分の生きがいになりましたね。仕事をすることが、自分自身を元気にしてくれると思っています」
福山さんが仕事を続ける上で、「一緒に働く職員の存在も大きい」といいます。事業所の開所当時、ケアマネジャーは福山さん1人だったが、現在は4人。年齢もケアマネジャー歴もバラバラの4人だが、情報を共有し、相談しながら



4
社会福祉法人 一燈園
福山 貴代美さん(67歳)



担当して4年目になる93歳の香川さん宅を訪問。
娘さんからの信頼も厚い。

仕事ができることに満足している。職員同士の関係も良いように、「一燈園」グループ全体で行われる食事会や忘年会、バス旅行などにも積極的に参加して楽しんでいるのだとか。
今後の福山さんの目標を聞いてみると、「健康で、1日でも長く働くことです。『一燈園』では私より年上の方がたくさん働いています。最高齢の方は73歳。私も先輩の後を追いかけていきたい」とキラキラとした笑顔を輝かせた。そんなエネルギー溢れる福山さんを目標とがんばっている若いスタッフたちも、きっと少なくないはずだ。

